

植村正久におけるアジア認識と歴史的和解（植村正久記念講座 第2回）

日時・2024年6月16日（日）15:00-17:00

会場・日本キリスト教会鶴見教会

はじめに

- 1) 植村正久と鶴見教会。『主をのみ宣べる一堀内友四郎先生を偲んで』。「植村正久先生」。
 - ・植村正久は、旗本の子に生まれた者として苦学をした。豚飼いの仕事。正式な学校教育は受けなかった。卒業証書を一枚ももらってない。
 - ・家庭的にも大きな傷手になることが多くあった。娘の死。植村環の夫の死など。ゆえに、植村の信仰は頭の信仰ではない。苦しみから生まれた信仰であり、それが命を与える説教の根源である。
 - ・佐波亘からの証言の紹介。伊藤春吉牧師との対話（台湾高雄教会の牧師）。「お互いに早かれ遅かれ、天国にいかなければならない身。一層のこと、君は台湾から行かれたらどうか」。
- 2) 植村におけるアジア認識と歴史的和解を取り上げる理由
 - ・植村の自己認識→「終ニハ在天愛父ノ擁護ニ由ッテ聖会ノ干城社会、人民ノ木鐸トモ成リ得エント欲スルナリ」。「人民ノ木鐸」が「社会の木鐸」の意味。
 - ・植村にとって「教会」と「社会」は、思想の世界において二つの中心をもつ楕円。二つのJ。
 - ・植村の朝鮮と台湾認識が、彼の神学的歴史認識として時代の変化の中で如何に形成されたのか。
 - ・歴史認識をめぐる葛藤がますます深まっている東アジアの歴史的和解の手係りを得ることを期す。

1. キリスト教評論家としての植村正久の横顔

- 1) 朝鮮支配権を巡って日、清、露の対立の時代
 - ・「征韓論」の提唱。相互の領事裁判権を認める清との平等条約締結（1871）。朝鮮より上位の国。
 - ・「江華島事件・雲揚号事件」による朝鮮との通商条約締結（1876）。不平等条約。無関税条約。
 - ・日清戦争と日露戦争。富国となる秘訣が戦争。
- 2) 植村の時代についての評論
 - ・帝国憲法（1899）と教育勅語（1890）の発布。天皇絶対主義の確立。内村鑑三による不敬事件。
 - ・植村は『日本評論』（1890）と『福音新報』（1891）を創刊。日本社会と明治政府を相手に、キリスト教的な観点から社会の啓蒙と文化・芸術の質的向上を狙う。
 - ・「宗教法案に付きて」（1900）→「心霊上の事柄、礼拝、聖礼典、教職の任免、会議の招集、開閉等に付きては、毫も国家の干渉を容るべきにあらず。余輩は近頃公にせられたる自由教会の問答に見ゆる教会の定義をあくまでも主張して一步も譲るところなからんを期す。たとい直ちに主張を実行すること能わざるにせよ、『強固なる抗弁者』として立たんと欲するものなり」。
 - ・「キリスト教ト皇室」（1886）→「キリスト教ハ将来ワガ皇室ニ対シ、イカナル関係ヲ有スベキカ。

或イハワガ固有ノ国体ヲ毀損スルコトアルベキカ。コレヲ論及スルニ先ズキリスト教ノ教理トソノ歴史ヲ述ベ、後ワガ国将来ノコトニ及ブベシ」。

→「社会変革」は、「人間変革」から始まるという認識。日本社会において「オピニオンリーダーとしての責任」を自負。「キリスト論的政治神学」へと発展するもの。アジアの歴史への認識。

2. 日清・日露戦争と植村正久—朝鮮の支配権を巡る二つの戦争

1) 植村の日清戦争に対する認識

- ・日清戦争（1894年7月－1895年3月）。近代国家として出発した日本の諸外国との最初の戦争。
- ・東学農民革命（1894）→重税に苦しむ朝鮮民衆が、宗教結社の東学党の指導下で蜂起し大規模な農民運動。自力での鎮圧が不可能なことを悟り、時の政府は、宗主国である清国の来援を求める。
- ・日本と清と締結した「天津条約」（1885）によって日本人居留民保護を目的で派兵。大本営を設置。日本側も部隊を送り込んできたことを危惧した朝鮮政府は急いで東学党と和睦し、6月11日までに農民反乱を終結させる。6月30日の時点で清国兵2500名に対し、日本兵8000名の駐留部隊がソウル周辺に集結する。日本と清との衝突。
- ・植村は主戦論的立場。優等の人種の天職。アジアの近代化的啓発に対する日本の時代的使命。
- ・「往て朝鮮を伝道せよ」（1893）→「我大日本は東洋の盟主なり。東洋の先導者なり。宗教に於て、政治に於て教育に於て技芸に於て、其の他百般の事。東洋諸国に冠たり。我等は東洋諸国を導くの責任を有せり。我等は今東洋伝道策を講ずる責任を有せり。我等は東洋諸国を伝道するの天職を有せり我之を信ずること久し」（島貴兵太郎）。
- ・「歴史上の危機、文明の扶植」（1895）→「戦争の価値はその戦争が文明の使者となる時において最も高貴なる者なり。今やわが日本が支那に対する戦争は、まさにこれこの文明の使者にあらずや。日本の支那に打ち勝つの度に比例して世界の文明は、次第にその藩籬を広げつつあることを記憶せざるべからず。（中略）。しかして今日はわが日本が、アメリカより受け取りたるこの文明を、またアジアの大陸に扶植する時機に立ち至りたるなり。これゆえに一度その身を軍籍に投じたる者は、何人もその双肩に文明の重荷を荷なえることを記憶せざるべからず。（中略）。なんとすれば支那と日本との戦争は、新時代の新文明と錆び腐れたる東洋の旧精神との戦争なればなり。歴史上の一大危機、日支戦争はこれ実に世界の文明史において最も有名なる戦争なり」。
- ・植村は欧米の文明を「文明の文明」、また「新時代の精神」と高く評価する一方、キリスト教的な文明ではない東洋の文明、すなわち「支那の文明」については「錆び腐れたる旧精神」と評価していることが分かる。

2) 植村と日露戦争

- ・日露戦争（1904-1905）。近代朝鮮に日清戦争よりもっとも大きな傷跡を残した戦争。朝鮮は郵便

を含め、すべての通信手段が遮断される。軍事情報網を除けば、朝鮮は外部世界から完全に孤立されていた。戦場が朝鮮半島であったため、もっとも被害を受けたのは朝鮮の民衆だった。戦争前には人口が8万人だった平壤からは半数以上の民衆が町から避難を余儀なくされる。

- ・植村はやや「非戦論」に立ちつつも、戦争の精神的意味である普遍的な文明の課題を追求。日本による朝鮮への植民地化は進んでいたにも関わらず、植村は日本の植民地政策、いわゆる隣国の侵略政策に関しては口を挟む。日露戦争をも「必要悪」とみている。
- ・「王たち君たちの羞恥」(1905) → 「ロシアは自らキリスト教国と唱えながら、抗争的キリスト教(プロテスタント)に対しては、わが日本ほどの自由を与えぬ。露国における伝道の不自由は、意外に甚だしと言わねばならぬ。ロシアの貴族専制主義と、その下民を虐待する罪悪は、遂に虚無党や無政府党を生み出し、シベリアの氷原には志士の骨が埋まっているとして悲惨を極めて居る。(中略)。その根底には道德上の腐敗が蟠って、彼らが敗戦の原因をなして居る。ロシア官吏の腐敗は清国とほとんど同じほどであるかも知れぬ。今やその罪悪の結果が表面に暴露せられて、国民の病が安易ならぬ程度に達して居るという事実を明らかならしめたのである」。やや非戦論の立場に立ちつつ戦争の本当の目的を正確に把握していない。
- 日清戦争は、欧米の文明を受け取った日本のアジア諸国に対する責任。日露戦争にいたってもなお、戦争の文明論的正当性を信じ続けていた。残念ながら隣国朝鮮の自主や朝鮮の人々の自由と尊厳について積極的な発言がほとんどない。

3. 日韓合併(1910年)と植村正久

1) 日本による朝鮮(韓国)植民地化

- ・「桂・タフト協定」(1905)。米国は当時の大韓帝国(以下、韓国)における日本の支配権を確認し、日本は米国のフィリピンの支配権を確認する。1905年11月には「第二次日韓協定」—韓国では「乙巳条約」とも言う—を締結し、韓国の外交権を剥奪。1907年6月のいわゆる「ハーグ事件」をきっかけに、同年7月には「第二次日韓協定」—韓国では丁未条約とも言う—を強要。一方では当時の皇帝であった高宗を強制的に退位させ、他方では韓国政府軍を解散させる。
- ・「韓国併合ニ関スル条約」による日韓合併。8月22日に漢城府(現ソウル市)で寺内正毅・統監と李完用・総理が調印し、同年8月29日に裁可公布して発効したもの。「韓国皇帝が大韓帝国の一切の統治権を完全かつ永久に日本国皇帝(天皇)に譲与する」などの内容を規定した条約。
- ・植村の「大日本の朝鮮」(1910年10月)という論説。朝鮮を日本の保護下に置くことを「東洋の進歩」に貢献できる「日本の天職」だという理解を示す。「東洋の平和を永遠に維持し、帝国の安全を将来に保障するの必要なるを念い、また常に韓国が禍乱の深淵たる顧みて韓国をその保護の下に置きしか、この目的を貫徹せんがために、更に進んで今回の併合を執行するに至れり。ただ帝国自己の存在を安全にし、禍乱を根絶し、東洋の平和を維持するに必要なるがためならず」。
- ・朝鮮の植民地化することを「大帝国となる運命」だという。そういう意味で「日本の発展の噴水領」。

- ・「大日本の朝鮮」(1910) → 「すなわち既に神より先祖たちに朝鮮国を与えられたるものなるがゆえに、これを併有するの権利有るなり。半島の人民が自ら経営するよりも、また自徐の外国がこれを企つるよりも、その歴史的の關係、地理上の位置、帝国人民の性格その天才および能力、先覚人民たるものの責任、特に神に由りて定められたらんかとも覺しき国民的親権者たるの本分などの事情よりすれば、日本が進んで朝鮮を併有しこれを扶植して、人類の進歩に貢献すべきは、道理において然かあるべきことなりと言わざるべからず」。

2) 「朝鮮陰謀事件」に対する植村の認識—植民地支配の支持から憂いへ

- ・「105 人事件」(1910 年 12 月)。「寺内正毅朝鮮総督暗殺未遂事件」。「朝鮮陰謀事件」。
- ・朝鮮総督府が朝鮮の基督教の活動に打撃を与えるためにでっち上げた陰謀事件。基督教の愛国啓蒙独立運動を鎮圧するため独立運動活動に資金工作など、独立活動をしていたキリスト者 160 人を検挙。

- ・朝鮮人キリスト者を抹殺するため、朝鮮総督府は、寺内総督の暗殺計画があったという虚偽の事件をでっち上げ、約 600 人を逮捕し、その中で 105 人を起訴する。総督府の自作劇。
- ・植村の評論。「朝鮮陰謀事件はその内にキリスト者が多数関係して居ると言うので、吾人は注意せねばならぬことである。なかんずく米国あたりの新聞紙にはこれに就きて種々の批評が出て居る。甚だしきは総督府(朝鮮総督府)が虚偽の訴えを構造したものであるとまで痛論して居る」。

- ・「朝鮮陰謀事件」(1911) → 「第一に、朝鮮法廷における陰謀事件裁判の報告が日本内地の新聞紙に由って詳細に報道されて居らぬ。(中略)。第二、無論裁判所においてかかることがあったと言うものは一人もないようだが、警察の手にある間に拷問を受けたという報告が甚だ多い。(中略)。この機会において日本の警察に拷問の秘密に行なわるという事実の有無を底の底まで探求してこれを明らかにすることは、甚だ必要である。(中略)。無罪よりして拷問のために揃いも揃って虚偽の自由をなしたりとはキリスト者の恥辱である」。

- 朝鮮総督府の武断統治に対する疑問を膨らむ。信教の自由への総督府の抑圧を批判。「人種的差別」による日本の統治の弊害への植村の神学的批判である。こうした植村の考えが朝鮮という植民地の教会と連帯して極力なナショナリズムに抵抗する教会闘争という思想を生み出す。

4. 台湾支配と植村正久

1) 植村の台湾理解

- ・台湾合併についての植村の論説(1896)。「台湾の島、日本人に帰せしは、将来に於ける一大責任の日本人に帰せしなり。吾が国人は如何なる精神を以て、此の責任を負担しつつあるか。台湾の開発と教化とに由りて彰はるべき其の技術は、神の前、列国環視のうちに、日本人が試験をうくることなり。吾が国人は異人種を包容同化し、己の勢力威権を以て人類の進歩幸福に一大寄与をなす資格を具へたる乎。(中略) 縦令目覺しき運動を為すこと能はざるも、台湾島民のなかに基督の証人を

送り、人類に事ふるてふ十字架の大義を唱へ、燻れる麻を熄さず、曲れる葦を折らず、一視同仁の精神を鼓吹し、自由平等の主義を発揚し、傲れる強に抗する上帝の名を以てし、凌辱侮蔑に泣くものを慰撫するに耶蘇基督の同情を以てするは、喜しきことに非ずや。規模の大小は言ふを要せず、斯の精神を以て、せめては今日の場合に成し得べきだけ伝道に着手するは、日本基督教徒の責任とす」(「台湾の伝道」、1896年)。

- ・日韓合併のときの評論とやや同じく、輝かしい勝利進軍のラッパに合わせて旗を振って進軍する姿と、あらぬものをかかえこんだ者の悩み、恐れ、責任の交錯。自戒、不安、憂悶はキリスト教伝道によって蔽われ、再度、積極的な植民地化への意味を見出す。植村は台湾支配を容認。
- ・植村は「台湾の開発と教化」が理想的な台湾伝道とみている。台湾人を「包容同化」することが、同時に台湾を進歩させることとの理解。しかし、実際には台湾在留の日本人のみが対象。
- ・「台湾土匪(どび)と水滸伝の講談」(1902)。植村は台湾の原住民を「思想単純」かつ「無教育」の民衆と定義する。土匪、すなわちゲリラ組織による蜂起反乱によって台湾統治の難題が増えるのではないかと懸念している。新渡戸稲造→「大学を卒業して赴くべきところとしてはふさわしいところではない」。明治期の日本の教養人の一般的な台湾認識。

2) 自己絶対化の誤謬—文明と野蛮という歴史認識

- ・「大日本の朝鮮」(1910) →植村は朝鮮人と台湾人を「土著人民」(土著・「どちゃく」。日本語では原住民の意味)と称する。台湾においては、日本が殖産工業の方面に盛んに発展しつつあるのを見ているという。朝鮮においては山を拓き、鉄路を通じ、農を興すなど、日本の責務だと言う。
 - ・植村の台湾への眼差しには「文明対野蛮」といった構図であり、それは朝鮮に対しても同じく投影されている。植村も多くの日本人キリスト者のように、近代西洋文明の呪縛から解放されることはなかったと言えよう。福音によって自己相対性という視点を失ってれば、自己を絶対化する誤謬を犯すのであろう。
 - ・植村の日本と台湾の同化論。「台湾青年に望む」(1924)という論説。「日本の民でありながら、何時までも水と油同様では困る」という。「本島人が優者である。同化とは必ずしも総てを内地化せしめんとする云ふ意味ではなからう。其の間に自由なる取捨が行われねばならぬ。中には内地人を同化せしむべき点もあるであらう」という。
- 台湾が日本に一方的に従属されることなく、互いに優れた文化と慣習などを取り入れ合うべきであるという同化論である。後退した「折衷主義的思考」。1920年代の風潮に乗っ取っている。第一世界大戦の戦勝国というプライドが働いていたのではないか。

5. 植村における植民地理解から教会的連帯へ

1) 植村の植民地認識と教会認識

- ・「大日本の朝鮮」→「日本の勢力は朝鮮のキリスト教といかなる関係を有せんするか。日本の教育制度および施設は朝鮮のキリスト教をいかに待わんとするか。これは多くのわが国人が想像しつつあるよりも重大なる問題にして、帝国の将来に深刻なる影響を及ぼすものなるべし。ここにおいて吾人は朝鮮合併の祝すると同時に、深く戒慎して、かつ望みかつ恐れ、ひたすら天佑に依らんと欲するの情転に切なるものあるなり」。
- ・「朝鮮におけるキリスト教伝道は盛んなもの」であり、また「朝鮮のようにキリスト教の勢力が大きいところでは、かえって日本人は学ぶべきものがある」という朝鮮のキリスト教に対する理解。
- ・教会認識が植民政策の見直しへと導く。国家権力による伝道の在り方を批判し、一線を画く。

2) 教会的連帯—自由教会の伝道

- ・隣国の痛みによる叫びに耳を傾けること。朝鮮での伝道においてキリスト教が日本化されることを避けること。植民地の教会の自主性を重んじない伝道は、宣教政策についての無知に起因する教会の「自給独立」を阻害してはいけない。
- ・「朝鮮のキリスト教」(1910) → 「由来朝鮮のキリスト者には排日思想を抱くものが多いという取り沙汰が世間に流布された。日本政府に向かって反抗的態度を取ったり、終始この方の処置に向かって障害物となる向きも朝鮮キリスト教徒の間にしばしば見受けられるという話を耳にしたこともある。我らはかかる風説の虚実を確かめて居らぬ。よし事実ならしむるとも、ここに倒れる原因とその動機とはいかなるものであるかを研究せねばならぬ。これを研究せずして、遽かに非難のみするは好ましからぬ所為である。いずれにしても朝鮮のキリスト者が国を憂え、独立を重んじ、他の威力に対して反抗するの氣勢を保つということが事実ならば、たとい根が浅く、中学生徒の無暗に威張るような意気であるにせよ、高尚な精神的方面から人道の側に立ちて、これを批評するならば、かえって末頼母しく、後世恐るべしとでも言うが適當であるまいか」。
- ・「朝鮮のキリスト教」(1910) → 「敵の健気なる振舞にも感服する日本の武士道から言っても、そうであろう。もしキリスト教の外国宣教師が朝鮮人民の間に屈從的精神を鼓吹し、無暗に柔和しく、何でも構わず太平無事の人民を養成したとするならば、これは日本人の気象として感服することの出来ぬ始末である。これどころか、それではキリスト教は国民の害であると認めて極力これに反対する態度を取るに至るが自然の結果であろう。朝鮮のキリスト教徒の中に或る人々のいうごとき気概でもあるならば、当分この方には少しく不便ではあるが、末を楽しんで歓迎すべきである。朝鮮八道せめては少数でもこういう程の者無くしてどうなるものか」。
- ・植村にとって朝鮮伝道とは、日本と朝鮮の両教会の「独立」のための国家主義に対する教会の戦いである。信仰の自由を守るための日本の教会と朝鮮の教会の連帯。教会の戦い、つまり、教会的連帯への集約は、一見、民族闘争、政治闘争からの逃避の如くみえるが、実は教会闘争は民族、政治闘争が、結局は支配者と同じナショナリズムにとらえられるとは違って、それを超える視座から唱えられる。

→明治の子としての時代的限界はあるにせよ、植村は他者との間に連帯をもとめ、ナショナリズムに対して一定の歯止めをもったキリスト教精神を、近代市民社会のエートスと規定。絶対的権威を有する神の僕でありたいというところから生まれた神学的精神。

結びに代えて—歴史的和解は可能なのか

1) 帝国主義の発露としての日清・日露戦争

- ・満州事変（1931）、日中戦争（1937–1945）、太平洋戦争（1941–1945）と続く入り口。
- ・歴史の変遷の中で、少なくとも東アジアにおいてもっとも悲惨な状況に立たされたのは、近代朝鮮・韓国、台湾であったことは否めない。台湾と朝鮮の民衆の苦しみを忘れてはいけない。
- ・日韓合併→日清戦争の際に日本中に広まった朝鮮の宗主国という意識。植民地支配の精神の象徴。

2) 戦争理解の矛盾

- ・戦争の悲惨さをみるよりむしろ、それを精神化させることによって清との戦争を容認。
- ・果たして戦争を精神化すること、また日本の道徳を伝える手段としての戦争理解は、正当化されるだろうか。
- ・文明と野蛮、進歩と開発といった二元論的な考えが、絶対悪である戦争を必要悪とし、国家を相対的に理解すべきキリスト教信仰から、国家主義的考えに虜になったのである。

3) 教会独立のための闘い

- ・植民地教会であっても信教の自由は守られるべきという考え。教会闘争へと導く。
- ・植民地教会の独立を求める闘争のみでなく、国家主義に対する日本の教会の闘争である。
- ・植民地教会との和解の道が開かれ、それによって教會的連帯が可能。
- ・真のキリスト者となる思想的・神学的な取り組みが、真の日本人となる道へと導き、そこではじめて差別が伴う植民地政策に批判を加えることができたのではないだろうか。
- ・植村にとって近代朝鮮と台湾は、日本のナショナリズムとともに戦う神の僕、教會的同志。

→歴史への神学的自己批判から、ナショナリズムという絶対主義を超える視座が生み出されるということ。植村正久の近代朝鮮と台湾認識は、「他者」という境界線を越える契機を与え、「絶対」と「相対」への新しい視座を与える神学的媒介である。植村からみれば、「歴史的歪曲による他者の痛み」は、「自己の歴史的歪み」であり、そういう意味で「他者の歴史の痛み」は「自己の歴史の痛み」である。歴史的痛みの共有ができるのは、信仰による戦いから与えられる。「朝鮮の教会の痛み」→「日本の教会の痛み」→「台湾教会の痛み」。信仰における歴史的痛みの共有（それは信仰における教会の連帯）が歴史的和解へと導く。